

日本民俗学会談話会修士論文発表会

2022 年 5 月 8 日

現代沖縄における土帝君信仰—村落祭祀の記録と実践—

筑波大学大学院 人文社会科学研究群

大城沙織 oshirosaori1111@gmail.com

【研究目的】

①沖縄における土帝君信仰の整理

→修士論文の主題とした土帝君とは、琉球王国時代に中国から招来された土地神のことを指す。1698 年（康熙 37）に琉球王府役人の鄭弘良が中国から土地公の神像を持ち帰って現那覇市大嶺に祀ったことに端を発する。そのため、土帝君のルーツは中国における土地神の土地公にあるとされるが、現在の土帝君信仰には多様な地域特性があり、必ずしも中国的な信仰の影響が強いとはいえない。例えば神体ひとつとっても、神像や石、絵像と分類できる。さらに原則的には土地神、農耕神とされるが、航海、大漁、子どもの健康祈願、火伏等さまざまな性格がある。土帝君に関してはこれまでは市町村史などで地域ごとの信仰の様相が描かれているのみであった。そのため土帝君信仰の普遍性や特殊性を把握したうえで議論を進める必要がある。

②土帝君信仰を中心に据え、現在の信仰実践から村落祭祀及びそれを支える人の関係性や拝所の資源化を視野に入れる。

→村落祭祀の信仰的側面のみならず、社会的側面をも含めた記述を目指した。

③祭祀の引継ぎノートや字誌、研究ノート、企画書等から、記録と実践の運動を捉える。

【方法】

①実践への注目

【背景】村落単位で祀られる土帝君だが、多くの地域では神役組織は衰退しており、自治会職員が代理として祀る。これまで祭祀に関わってこなかった自治会職員による信仰実践にはどのような困難があり、どのような工夫があるのか。

・宗教実践は神々、祖先等の「超自然的存在」とのコンタクト・ゾーン（田中 2012）

・霊的な素質をもたないと自称する自治会職員の「信仰」

→新型コロナウイルス流行下においても「人間の都合は神様には関係ない」として拝みを実施する。

・本研究では 2019 年から 2021 年 11 月まで、長期的な参与観察・聞き書き調査を行った。

②「書かれた民俗」への注目

【背景】沖縄においては、地域の人による『字誌』の発刊が盛んであり、2000年までに刊行された字誌は500点を超える（中村 2001）

・字誌が執筆者たちの見解や事物の評価を述べたものであるとすれば、被調査者側からの情報発信（古家 1996）

・字誌は創造性や表現性を制限しようとする意識の作用がみえる「共同のライフヒストリー」（末本 2013）

→「書かれた民俗」と信仰実践との往復運動に注目した

【修士論文目次】

序章 本章の目的と方法

- 1 節 はじめに
- 2 節 先行研究整理と目的
- 3 節 方法
- 4 節 論文構成

1 章 土帝君概要

- 1 節 分布
- 2 節 名称
- 3 節 形態
- 4 節 性格
- 5 節 祭日
- 6 節 祭祀組織
- 7 節 招来に関わる伝承
- 8 節 中国・台湾の土地公

2 章 佐敷における土帝君信仰

1 節 調査地選定理由及び概要

- 1 項 調査地選定理由
- 2 項 地勢
- 3 項 人口
- 4 項 歴史

2 節 佐敷6地域における拝所の配置

3 節 佐敷6地域における土帝君信仰一年中行事を中心に――

- 1 項 宇佐敷
- 2 項 津波古

- 3 項 小谷
- 4 項 新里
- 5 項 手登根
- 6 項 屋比久

4 節 2021 年の祭祀の様子

- 1 項 参加者
- 2 項 自治会職員による「手探りの祭祀」

3 章 津波古における土帝君信仰

1 節 調査地選定理由及び調査地概要

- 1 項 調査地選定理由
- 2 項 地勢
- 3 項 人口
- 4 項 歴史
- 5 項 生業
- 6 項 宗教施設

2 節 年中行事の構成

- 1 項 農耕儀礼
- 2 項 航海安全・大漁祈願
- 3 項 その他
- 4 項 年中行事の変更

3 節 津波古の拝所

- 1 項 『琉球国由来記』における津波古の拝所
- 2 項 殿
- 3 項 御嶽
- 4 項 井戸・泉井戸・樋井
- 5 項 土帝君
- 6 項 竜宮神

4 節 祭祀組織

- 1 項 戦前の神役組織
- 2 項 現在の神役組織—津波古自治会—

5 節 自治会職員による実践

6 節 現代における拝みの実践

- 1 項 祭祀における区長の職務とその継承
- 2 項 祭祀における女性職員の職務とその継承
- 3 項 実践の中で培われる村落祭祀への関心

4章 記録された土帝君—津波古字誌—

1節 津波古字誌編纂

2節 「正俊ノート」と瀬底正俊氏

1項 瀬底正俊氏の略歴と俳句

2項 「正俊ノート」と瀬底正俊氏

3節 津波古字誌における土帝君の記述—「正俊ノート」及び正俊氏による原稿との比較—

5章 公共空間としての拝所

1節 2度にわたる土帝君の移動—広場としての土帝君—

2節 演出される土帝君と空間

3節 区民活動の場としての土帝君

終章

1節 考察

1項 津波古の土帝君の位置づけ

2項 津波古の土帝君の動態

3項 社会状況による影響

4項 記録された土帝君と信仰実践—「氏神」「鎮守の森」としての土帝君—

2節 今後の課題

参考文献

謝辞

表・地図・グラフ・写真

【先行研究整理】

・沖縄の村落祭祀研究

・村落祭祀の中核となる御嶽に対する研究及び親族集団に対する研究が古典的になされてきた（仲松 1990）（W.P.リーブラ 1974）（比嘉 1983）

・島嶼という孤立の特徴から地域的な変差が大きいため、細かい個別地域の個別事例のデータの蓄積を重ねていく傾向（森田 2002）。

・担い手の多様性とその変容についての研究（平井 2007）

・米軍基地に接収された地域の祭祀研究（山内 2019）

→沖縄に日本文化の「現郷」を求める静態的な研究から、沖縄の生活の変化を村落祭祀から描こうとする研究へ

・沖縄における外来信仰の研究

九学連合会の調査：陰陽道やニンブチャーなどの在来宗教と習合した外来宗教への調査（窪編 1978）。→窪徳忠：「外来の宗教や信仰は沖縄の基層のそれに組み込まれて受容され、しかも基層のそれをこわさずに、それらと並存しているらしいという印象を受けた。」（1976 p.364）→広義の外来宗教

吉野航一（2012）：「沖縄らしい」とはされない外来宗教への着目。→在来宗教と習合した広義の外来宗教ではなく、在来宗教と類似性の低いキリスト教や新宗教の受容、スピリチュアティと関連する宗教性の広がりに対する研究。→狭義の外来宗教

個々の「外来」信仰に対する研究

・仏教：15、16 世紀から琉球処分まで：寺社は王府の為の祈祷をする官社官寺であるが薩摩の宗教政策によって僧侶の活動は規制。琉球処分後：明治政府の下で信仰の自由が認められる一方で秩禄処分後王府の保護を離れて寺社独自の活動を開始（島尻 1980）。

・神道：14 世紀から 16 世紀にかけて建立された琉球八社に関する研究。琉球王府と神社の関係、琉球処分後の御嶽の神社再編についての研究（加持 2000）（鳥越 1965）

・キリスト教：二つの側面からの研究①戦後の米軍統治に起因する政治的問題とキリスト教会との関係を考察したもの。②キリスト教と在来宗教との関係性（吉野 2012）キリスト教の受容について（安斎伸 1984）

⇒個々の信仰の研究：琉球王府や薩摩、日本との政治性が表出、沖縄の民俗世界を基盤とした各信仰の受容の在り方が示されている

・中国的信仰：媽祖や関帝といった久米系を中心とした信仰、風水

・土帝君信仰：比較宗教の関心から中国・台湾の城隍神や土地公、后土と、沖縄の土帝君の比較検討。（窪 1971 ほか）

⇒土帝君は狭義の外来宗教（特にキリスト教や仏教、神道）と異なり、琉球王府や大日本帝国、米軍との政治的問題（信仰の奨励、禁教）に関する史料や伝承がほとんどなく、「在来の信仰」と習合した存在。さらに媽祖や関帝と異なり、その分布は久米系住民だけにとどまらず沖縄の農村に広がっている。

→土帝君の「外来性」とは何か、という問い。

従来研究されてきた血縁を基盤とし琉球王府の祭政一致に組み込まれた信仰とは異なる文脈に属しながらも、村落に受容された存在。この外来性を考えるには、毎回の祭祀の実践の丹念な記述の積み重ねが必要。土帝君の外来性とは、どの親族集団にも属さない「消極的な外来性」ではないか。

→外来信仰を取り上げるうえで必須となる中央との関係やそれを取り巻く政治性についても、あくまでも地域の人の日々の実践の中から捉える。

【調査地および調査地選定理由】

2 章の調査地：沖縄県南城市佐敷地区（旧佐敷町・佐敷村・佐敷間切）

地勢：沖縄本島南東部に位置し、中城湾を囲むように集落が広がり、「馬の蹄のよう」と表現される。

人口：（2022 年 3 月末）4874 世帯、11254 人。

歴史的背景：1439 年三山を統一し琉球国を成立させた尚巴志生まれの地。（字佐敷）琉球国時代には王妃直轄地であるほか、王府の巡礼行事「東御廻り」の拝所も地区内に複数存在している。なお、佐敷地区は旧佐敷町として一つの自治体であったが、2006 年に大里村、玉城村、知念村との合併を経て、南城市佐敷地区となった。

2 章：調査地選定理由

土帝君信仰は地域ごとに多様な様相が存在している一方、近隣地域の土帝君信仰には祭日、招来の背景等、類似傾向も指摘できた。その為、本章では一定の範囲に絞って地域内の土帝君信仰を並べて記述することで、各地域の年中行事や信仰実践を描くことを目的とする。

土帝君は佐敷地区の 6 地域で信仰されている。この 6 地域は佐敷地区の古村とほぼ一致しており、沖縄県全域のなかでも佐敷地区は土帝君の密集地帯といえる。佐敷地区は半農半漁村であった津波古を除いて基本的に農村地帯である。沖縄島全域を見渡してみると、その多くは農村であり、土帝君もまた農村で信仰されることが多い。農村の古村に祀られる土帝君という最もオーソドックスな土帝君信仰を複数地域にまたがって描くことで、市町村史では記述しきれなかった信仰の実際、いわば「実践」について捉え、多様で動態的な土帝君信仰を一般化していくうえでの一助としたいと考えた。

3 章の調査地：沖縄県南城市佐敷字津波古

地勢：佐敷地区の中では最も西に位置する地域。那覇から車で 40 分程度の那覇都市圏である。津波古の北側には馬天港があるほか、南側は緩やかな斜面となっており南城市大里地区と接する。

人口：（2022 年 3 月末時点）1655 世帯 3816 人

特徴的な親族集団：四元（ユームトゥー）津波古の発祥に関わるとされる、多和田子、松堂之子、外間子、喜屋武久子の 4 家のこと。うち、外間子と喜屋武久はそれぞれ中山王尚巴志に滅ぼされた北山攀安知の三男と四男。戦前から現在まで津波古自治会が行う年中行事では、四元の神屋や殿を拝む。また、戦後の土地接収の際には優先的に宅地を割り当てられるなど、特権地位にあった。

歴史的背景：津波古は農村でありながら比較的早い時期から移住者が多いという特徴がある。具体的には以下の人口増加を経験している。

①1895 年：馬天港に海軍施設の設置

日清戦争のため、台湾に派遣する艦船に必要な燃料である石炭の中継著蔵所と給水地の確保が必要となったため。

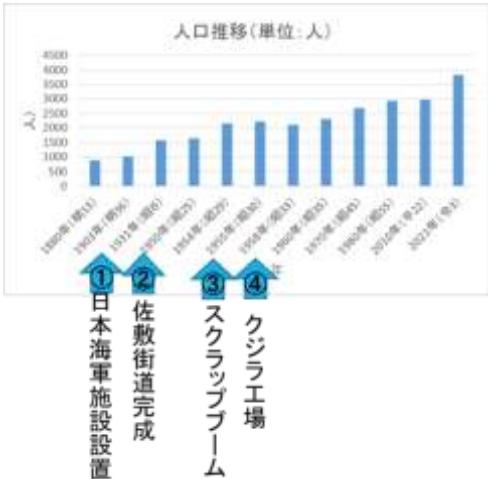
②1904 年：那覇から馬天港付近までの佐敷街道が完成。これにより街道沿いに店が立ち並ぶようになる。新組の結成。

・1945 年沖縄戦

③1955 年頃：クラブブーム

スクラップ：沖縄戦で海に沈んだ艦船、戦車など。海中から引きあげて現金化した。

④1957 年：沖縄近海捕鯨業がはじまる（しかし 3 年で廃業）



人口推移グラフ（『津波古字誌』参考 筆者作成）

3 章：調査地選定理由

自治会が中心となって執り行う祭祀を村落祭祀であると捉えた時、津波古の年中行事は多い。さらにその全てで土帝君は拝まれており、津波古の数ある拝所のなかでも存在感を持っている。

日時	祭名	内容	拝所
新暦1月1日	初詣	土帝君を飾り付け、初詣	土帝君
1月3日	初ウビー	新年の挨拶として地域の繁栄を祈願する	水に関わる拝所13ヶ所、土帝君
4月	虫焼い	害虫駆除	土帝君
5月4日	海神祭	航海安全、豊漁祈願	土帝君、竜宮神
4月4日から最も近い日曜	馬天ハーリー	肥後船競漕	
5月15日	御祭ウマチー	豊作祈願、稲の初穂儀礼	殿、ムートウヤー、場天御嶽、小谷神座敷、土帝君
6月26日	アミシお願	雨乞い祈願	殿、ムートウヤー、天人森、大石、土帝君
7月16日から最も近い日曜	ヌーパレー	芸能の披露	土帝君
8月15日	15夜拝み	獅子を拝み、地域の繁栄を祈願する	殿、ムートウヤー、獅子、土帝君
8月15日から最も近い日曜	15夜祭り	村芝居	
8月	白露のお願	男子の健康安全	安次富ムートウヤー、天神森、土帝君
9月9日	旗の祈願	地元を離れた人の安全祈願	土帝君
9月18日	子どもの健康祈	子どもの健康祈願	土帝君
新暦11月3日	慰霊祭	戦没者追悼式	戦没者慰霊塔（土帝君救地内）
12月24日	御願ブチ	祈願した場所への感謝と願を解く	竜宮神及び慰霊塔を除く上記すべての拝所

津波古の年中行事 聞き取り調査・参与観察を基に筆者作成

また、津波古は琉球処分以降、激しい変化の渦に巻き込まれた地域でもある。地域内の馬天港に海軍施設が設置されたことによる人口増加、「マチ」の形成のほか、戦後は米軍に土地を接収され「馬天区」という新しい自治会を立ち上げた。変化していく地域のなかで土帝君信仰はどのように立ち現れたのか、関心をもった。

【各章（1 章～終章） 概要】

1 章 土帝君概要

土帝君は 63 の地域（一部は家庭・門中）で信仰されている（窪 1990）。その信仰の様相や招来時期は地域によって大きく異なる。そのため、修士論文で土帝君信仰を取り上げ

るのにあたり、まずは市町村史の記述及び発表者の実地調査、聞き取り調査をもとに、沖縄における土帝君信仰について整理を試みた。具体的には土帝君信仰の分布、名称、形態、性格、祭日、祭祀組織、招来に関わる伝承の7項目ごとにまとめた。また参考として土帝君と関係の深い中国・台湾の土地公についても記述した。さらに土帝君は招来の伝承及びその祭祀組織からA-1役人と親和性が高い土帝君、A-2親族集団（門中）との親和性が高い土帝君、B職能集団によって祀られた土帝君、C移住を契機に祀られた土帝君、D民間宗教者によって祀られた土帝君に分類した。AからDにかけて時代が下る傾向にあることを指摘した。

2章 佐敷における土帝君信仰

1章で土帝君の様相は近隣地域において類似傾向がみられた。佐敷地区は土帝君信仰の密集地域であるといえるから佐敷地区を調査地として選定し、佐敷6地域で祀られている土帝君の配置、年中行事についてまとめ、字佐敷、新里、津波古、3地域の祭祀の様子について参与観察を行った。

佐敷地区で祀られる土帝君の配置は村落後方にあること、公民館（ムラヤー）の付近にあること、拝所には広場としての機能もあることが村落の空間配置上の類似点として挙げられる。また津波古、小谷、新里の3地区は琉球国時代に馬天ノロの管轄下にあった。この3地区は土帝君に十二支の守り本尊と七宮を合祀しており、この共通点は村落連合としての結びつきを示唆しているのではないかと指摘した。

現在、佐敷地区の村落祭祀は「霊的な素質を持たない」自治会職員によって担われている。「拝みが通ったかどうかさえも分からない」と述べる自治会職員は、手探りの実践を行い、時に地域の「先輩」からも誤りを指摘される。拝みについて迷いが生じた際には、自治会職員自身の個人的な人間関係のなかで相談し、これが拝みにも反映される。個人的な人間関係は、各集落で完結しているわけではないため、結果的に近隣集落の影響を受けることとなる。これが結果として1章で見受けられた信仰の類似傾向を生むと考える。

3章 津波古における土帝君信仰

3章では2章で取り上げた佐敷のなかでも、シマ（集落単位）で津波古を取り上げる。津波古は沖縄で祀られる土帝君のなかでも祭日が最も多い為、ミクロスケールの調査地として選定した。琉球処分以降、馬天港が日本海軍の軍港に指定され、戦後もスクラップブームやクジラ工場といった産業があった為、津波古はこれまでに数回の人口増加ブームを体験している。そうした地域状況を背景にしながら、津波古の拝所、年中行事、祭祀組織についてまとめ、現在の土帝君祭祀という観点から津波古自治会が行う村落祭祀と、イレギュラーな対応について、参与観察、聞き取り調査をもとに述べた。

自治会職員による拝みの実践には裁量があるものの、「津波古住民にどうみられるか」を意識しながら実践されており、拝みの場での行為には自治会内での職名やジェンダー意

識が強く働いていた。これまで拝みに参加することがなかった人が自治会職員に就任し、「見よう見まね」で拝みを学ぶため、実践には不明点が多い。また拝みの意味などは特に語られることはないが、言語化の契機があった際には自治会職員間での認識のずれが表出することとなる。そのため、不明点に対する回答を求めたり、メディアによる取材や代表挨拶など公的な場での発言に根拠をもたせたりするため、適宜参考にされていたのが記録であった。

4章 記録された土帝君—津波古字誌—

村落祭祀の場で読まれる『津波古字誌』は2012年に津波古自治会によって発行された769ページにもわたる字誌である（津波古自治会 2012）。『津波古字誌』の編纂の中心人物には瀬底正俊氏が存在しており、字誌の記述の8割が正俊氏によるものである。また「正俊ノート」は正俊氏の個人的な研究ノートで、そこに記された土帝君をはじめとする考察もまた字誌の記述と関連が深い。

4章では「正俊ノート」と『津波古字誌』の比較を通して、正俊氏自身の考察が如何に『津波古字誌』に反映されていったのか迫った。正俊氏による原稿では土帝君が中国由来の神であること、沖縄全体の土帝君に関する記述があったが、発行された字誌にはこれらの記述は削除されている。また字誌が村落の「共同のライフヒストリー」（末本 2013）であることから、正俊氏の考察的文章も基本的には削除され、正俊氏の存在は隠されている。一方で残されたのは土帝君を「氏神的」とする記述であった。

5章 公共空間としての拝所

土帝君の社会的側面である「公共性」について記述する。土帝君は複数回の移動を経験しているが、歴史的に拝所の再建にあたって重要視されたのは「集う空間」としての広場であった。また人が集うことを目的に、慰霊祭や初詣企画も行われている。正俊氏は「正俊ノート」において新暦及び旧暦の1月1日に土帝君を拝む人が少なく、信仰がすたれてきていることを嘆いている。こうした嘆きは地元住民の声として自治会が取り上げ、実施されたのが土帝君の初詣企画であった。初詣企画では土帝君が神社風に飾り付けされ、参拝者は二礼二拍手一礼で拝む。まさに土帝君を「氏神」として「神社」に転換する試みである。さらに現在、進行している企画としては「人の和を香りで包む腰当森（鎮守の森）～つなぐ場づくりで、つながる～」がある。これは土帝君を「腰当森＝鎮守の森」と読み替え、津波古字民を越えた範囲での「みんなの庭」の構築を目指す企画である。このように土帝君は「集う場」としての機能を維持し、そこに集う人の範囲は現在において津波古地域を越えた拡がりを見せている。

終章

津波古の土帝君は元来から役人との関わりが深い土帝君であると推測され、沖縄県全域でも最も多いパターンである。しかし津波古の土帝君は2度の拝所の移動と関連して、1

期、2期、3期に分けることができる。1期においては他地域と大きく変わらない土帝君であったが、2期において七宮、十二支の守り本尊を合祀するようになる。またこのことが土台となって、沖縄戦後の3期において土帝君は「お宮さん」とも称されるようになり、毎回の村落祭祀で祀られる存在となった。その背景には人口増加や土地接収、さらには神役組織の衰退がある。また『津波古字誌』の発行を経ることで、土帝君が「氏神」的な性質を持つことは根拠が強化され、字誌の記述と呼応するように中国との関連を思わせる供物（三牲）を供えることはなくなり、また中国を由来とする伝承は聞くことができなくなっている。

津波古において土帝君の記録は、土帝君信仰を固定化するものではない。「手探り」の実践のなか、記録は手掛かりとなり、新たな実践を生んでいる。琉球近世期に役人層によって招来された土帝君は、そのような村落祭祀の実践を如実に反映される存在である、と結論付けた。

【資料 土帝君信仰の整理に関する表】

所在地・名称・形態・祭祀組織・招来に関わる伝承について、聞き取り調査や市町村史を基に以下の表にまとめた。

(1)所在地 実地調査及び市町村史より筆者作成

番号	場所	実地調査・参考文献	番号	場所	実地調査・参考文献・HP
1	国頭郡国頭村奥間	実地調査	17	中頭郡北谷町桑江	米軍基地内・参考文献④⑤⑥
2	国頭郡今帰仁村越地	実地調査	18	中頭郡北谷町砂辺	実地調査
3	国頭郡本部町瀬底	実地調査	19	中頭郡北谷町玉代勢	参考文献⑤
4	国頭郡本部町浜元	実地調査	20	中頭郡北谷町北谷(山川家)	参考文献④⑥
5	国頭郡宜野座村松田	実地調査	21	中頭郡北谷町上勢頭	参考文献④⑥
6	うるま市与那城屋慶名	実地調査	22	中頭郡北谷町伊礼(現伊平地区)	参考文献⑤
7	うるま市喜屋武(現在は喜仲)	実地調査	23	中頭郡西原町棚原	実地調査
8	うるま市宮里	実地調査	24	中頭郡西原町翁長	現存しない・参考HP①
9	うるま市平良川	参考文献①	25	中頭郡西原町我謝	実地調査
10	うるま市桃原(宮城島)	実地調査	26	宜野湾市大謝名	実地調査
11	中頭郡読谷村喜名	実地調査	27	宜野湾市宜野湾	実地調査
12	中頭郡読谷村親志	実地調査	28	浦添市牧港	現存しない・参考文献⑦
13	中頭郡読谷村長田	現存せず・参考文献②	29	那覇市久米	参考文献④
14	中頭郡嘉手納町水釜	実地調査	30	那覇市安里	実地調査
15	中頭郡嘉手納町千原	実地調査	31	那覇カラヤー(長田へ移動)	実地調査
16	中頭郡嘉手納町久得	米軍基地内・参考文献③④	32	那覇市宇栄原	参考文献④⑧
番号	場所	実地調査・参考文献	番号	場所	実地調査・参考文献
33	那覇市大嶺(現宇栄原)	実地調査	49	豊見城市我那覇(現仲嘉地)	実地調査
34	那覇市国場	実地調査	50	豊見城市平良	参考文献⑨
35	那覇市首里平良	参考文献④	51	南城市佐敷小谷	実地調査
36	那覇市壺屋	実地調査	52	南城市佐敷佐敷	実地調査
37	那覇市安次嶺	実地調査	53	南城市佐敷新里	実地調査
38	那覇市垣花(現山下町)	実地調査	54	南城市佐敷津波古	実地調査
39	那覇市真嘉比	参考文献④	55	南城市佐敷手登根	実地調査
40	那覇市牧志	実地調査	56	南城市佐敷屋比久	実地調査
41	那覇市石嶺	実地調査	57	糸満市武富	実地調査
42	那覇市首里山川	実地調査	58	伊是名村諸見	参考文献⑩④
43	那覇市松川	実地調査	59	伊是名村勢理客	参考文献⑩④
44	那覇市寄宮(長田・那覇カラヤーと同一か)	実地調査	60	伊平屋村我喜屋	参考文献⑪④
45	那覇市安謝	参考文献⑬	61	伊平屋村田名	参考文献⑪④
46	那覇市泊	実地調査	62	久米島上江洲	参考文献⑫⑬④
47	那覇市若狭	実地調査	63	久米島大原	参考文献④
48	豊見城市与根	実地調査			

参考文献

- ①うるま市具志川市史編纂委員会編 2011 『具志川市史 第八巻 民俗編上』 うるま市教育委員会発行
- ②読谷村史編集委員会 1995 『読谷村史 第4巻資料編3 読谷の民俗上』 読谷村役場
- ③久得史編纂委員会 2019 『嘉手納町「久得史」』 久得郷友会
- ④窪徳忠 1990 『目でみる沖縄の民俗とそのルーツ』 沖縄出版
- ⑤山内健治 2019 『基地と聖地の沖縄史 フェンスの内で祈る人びと』 吉川弘文館
- ⑥北谷町史編集委員会 1992 『北谷町史第3巻資料編2 民俗上』 北谷町役場
- ⑦浦添市史編集委員会 1983 『浦添市史 第4巻資料編3 浦添の民俗』 浦添市史編集委員会
- ⑧波平エリ子監修 2012 『小禄の拝所』 那覇市小禄南公民館
- ⑨窪徳忠 1970 「沖縄地方の土帝君信仰」 窪徳忠編 『沖縄の社会と習俗』 東京大学出版会
- ⑩伊是名村史編集委員会 1989 『伊是名村史下巻（島の民俗と生活）』 伊是名村
- ⑪諸見清吉編 1981 『伊平屋村史』 伊平屋村史発刊委員会
- ⑫久米島西銘誌編集委員会 2003 『久米島 西銘誌』 久米島西銘誌編集委員会
- ⑬沖縄久米島調査委員会編 1983 『沖縄久米島資料篇 「沖縄久米島の言語・文化・社会の総合的研究」 報告書』 弘文堂
- ⑭那覇市企画部市史編集室編 1979 『那覇市史資料篇第2巻中の7 那覇の民俗』 那覇市企画部市史編集室

参考 HP

- ①西原町ホームページ

<http://www.town.nishihara.okinawa.jp/asset/29tanaharahigakenodoteikun.html>

(最終閲覧日 2022 年 4 月 25 日)

(2)地図（省略）

(3) 名称 (参考文献リストは最後にまとめた)

場所	名称①	名称②
1 国頭郡国頭村奥間	トーチークー	
2 国頭郡今帰仁村越地	不明	
3 国頭郡本部町瀬底	トゥーティンク	ティーティンク
4 国頭郡本部町浜元	トゥーティーク	
5 国頭郡宜野座村松田	不明	
6 うるま市与那城屋慶名	トゥーティークー	
7 うるま市喜屋武(現在は喜仲)	トゥーティークー	
8 うるま市宮里	トゥーティークー	フトウキンウェー
9 うるま市桃原(宮城島)	不明	
10 うるま市平良川	不明	
11 中頭郡読谷村喜名	トゥーティークー	
12 中頭郡読谷村親志	トゥーティークー	
13 中頭郡読谷村長田	トゥーティークー	
14 中頭郡嘉手納町水釜	トゥーティークー	ミヤ
15 中頭郡嘉手納町千原	トゥーティークー	土帝宮
16 中頭郡嘉手納町久得	トゥーティークー	ウタキ小
17 中頭郡北谷町桑江	トゥーティークー	クラヌカミ
18 中頭郡北谷町砂辺	トゥーティークーの神	
19 中頭郡北谷町五代勢	トゥーティークー	
20 中頭郡北谷町北谷(山川家)	トゥーティーク	
21 中頭郡北谷町上勢頭	不明	
22 中頭郡北谷町伊礼(現伊平地区)	トゥーティーク	
23 中頭郡西原町棚原	トゥーティーク	
24 中頭郡西原町翁長	トゥーティーク	
25 中頭郡西原町我謝	不明	
26 宜野湾市大謝名	トゥーティークー	
27 宜野湾市宜野湾	トゥーティークー	
28 浦添市牧港	クーティークン	クーティークー
29 那覇市久米	不明	
30 那覇市安里	トーチークー	
31 那覇カラヤー(長田へ移動)	トーチークー	
32 那覇市宇栄原	土帝君王仁	
33 那覇市大嶺(現宇栄原)	トゥーティークー	祠をティラ
34 那覇市国場	トゥーティークー	祠をティラ
35 那覇市首里平良	トーチークー	
36 那覇市壺屋	トゥーティークー	地名はニシのお宮
37 那覇市安次嶺	トゥーティークー	
38 那覇市垣花(現山下町)	トゥーティークー	
39 那覇市真嘉比	不明	
40 那覇市牧志	クーティークー	
41 那覇市石嶺	トーチークー	
42 那覇市首里山川	トーチークー	
43 那覇市松川	不明	
44 那覇市寄宮(長田(那覇カラヤー)と同一か)	不明	
45 那覇市安謝	トゥーティークー	
46 那覇市泊	不明	
47 那覇市若狭	不明	
48 豊見城市与根	トーチークン	クーティークン
49 豊見城市我那覇(現仲嘉地)	クーティークン	
50 豊見城市平良	不明	
51 南城市佐敷小谷	トゥーティンクン	
52 南城市佐敷佐敷	トーチークン	イモウフスー
53 南城市佐敷新里	トゥーティンクン	フトウキンメー
54 南城市佐敷津波古	トゥーティンクン	お宮
55 南城市佐敷手登根	トゥーティンクン	
56 南城市佐敷屋比久	トゥーティンクン	
57 糸満市武富	トゥーティークン	地名はフトウキンメー
58 伊是名村諸見	フトウキ	ヤーウヌフトウキ
59 伊是名村勢理客	トゥーティーク	トーチーク
60 伊平屋村我喜屋	トーチークン	
61 伊平屋村田名	不明	
62 久米島上江洲	不明	
63 久米島大原	不明	

(4)神体の形態（参考文献リストは最後にまとめた）

場所	形態		
1 国頭郡国頭村奥間	神像	32 那覇市宇栄原	不明
2 国頭郡今帰仁村越地	神像	33 那覇市大嶺(現宇栄原)	石
3 国頭郡本部町瀬底	神像	34 那覇市国場	神像
4 国頭郡本部町浜元	神像	35 那覇市首里平良	不明
5 国頭郡宜野座村松田	神像	36 那覇市壺屋	不明
6 うるま市与那城屋慶名	神像	37 那覇市安次嶺	石
7 うるま市喜屋武(現在は喜仲)	無	38 那覇市塩花(現山下町)	石
8 うるま市宮里	無	39 那覇市真嘉比	不明
9 うるま市桃原(宮城島)	無	40 那覇市牧志	石
10 うるま市平良川	無(香炉)	41 那覇市石嶺	無
11 中頭郡読谷村喜名	石	42 那覇市首里山川	不明
12 中頭郡読谷村親志	石	43 那覇市松川	無
13 中頭郡読谷村長田	無	44 那覇市寄宮(長田(那覇カラヤー)と同一か)	神像
14 中頭郡嘉手納町水釜	石	45 那覇市安謝	不明
15 中頭郡嘉手納町千原	石	46 那覇市泊	石
16 中頭郡嘉手納町久得	不明	47 那覇市若狭	石
17 中頭郡北谷町桑江	石	48 豊見城市与根	石
18 中頭郡北谷町砂辺	石	49 豊見城市我那覇(現仲嘉地)	石
19 中頭郡北谷町玉代勢	不明	50 豊見城市平良	不明
20 中頭郡北谷町北谷(山川家)	石	51 南城市佐敷小谷	神像
21 中頭郡北谷町上勢頭	絵	52 南城市佐敷佐敷	石
22 中頭郡北谷町伊礼(現伊平地区)	不明	53 南城市佐敷新里	無
23 中頭郡西原町棚原	神像	54 南城市佐敷津波古	神像
24 中頭郡西原町翁長	現存せず	55 南城市佐敷手登根	無
25 中頭郡西原町我謝	無	56 南城市佐敷屋比久	神像
26 宜野湾市大謝名	石	57 糸満市武富	石
27 宜野湾市宜野湾	神像	58 伊是名村諸見	神像
28 浦添市牧港	無	59 伊是名村勢理客	不明
29 那覇市久米	不明	60 伊平屋村我喜屋	不明
30 那覇市安里	石	61 伊平屋村田名	不明
31 那覇カラヤー(長田へ移動)	神像	62 久米島上江洲	不明
		63 久米島大原	不明

(5)祠の形態（参考文献リストは最後にまとめた）

	場所	類型
1	国頭郡国頭村奥間	神社型
2	国頭郡今帰仁村越地	家型
3	国頭郡本部町瀬底	赤瓦型
4	国頭郡本部町浜元	神社型
5	国頭郡宜野座村松田	赤瓦型
6	うるま市与那城屋慶名	赤瓦型
7	うるま市喜屋武(現在は喜仲)	家型
8	うるま市宮里	小祠型
9	うるま市桃原(宮城島)※	神社型
10	うるま市平良川	不明
11	中頭郡読谷村喜名	琉球石灰岩型
12	中頭郡読谷村親志	家型
13	中頭郡読谷村長田	不明
14	中頭郡嘉手納町水釜	赤瓦型
15	中頭郡嘉手納町干原	剥き出し型
16	中頭郡嘉手納町久得	不明
17	中頭郡北谷町桑江	不明
18	中頭郡北谷町砂辺	剥き出し型
19	中頭郡北谷町玉代勢	小祠型
20	中頭郡北谷町北谷(山川家)	不明
21	中頭郡北谷町上勢頭	不明
22	中頭郡北谷町伊礼(現伊平地区)	剥き出し型
23	中頭郡西原町棚原	琉球石灰岩型
24	中頭郡西原町翁長	現存せず
25	中頭郡西原町我謝	家型
26	宜野湾市大謝名	琉球石灰岩型
27	宜野湾市宜野湾	琉球石灰岩
28	浦添市牧港	現存せず
29	那覇市久米	不明
30	那覇市安里	神社型
31	那覇カラー(長田へ移動)	神社型
32	那覇市宇栄原	不明
33	那覇市大嶺(現宇栄原)	小祠型
34	那覇市国場	琉球石灰岩型
35	那覇市首里平良	不明
36	那覇市壺屋	赤瓦型
37	那覇市安次嶺	赤瓦型
38	那覇市垣花(現山下町)	赤瓦型
39	那覇市真嘉比	不明
40	那覇市牧志	赤瓦型
41	那覇市石嶺	赤瓦型
42	那覇市首里山川	赤瓦型
43	那覇市松川	赤瓦型
44	那覇市安謝	不明
45	那覇市泊	剥き出し型
46	那覇市若狭	剥き出し型
47	那覇市与儀	家型
48	豊見城市与根	剥き出し型
49	豊見城市我那覇(現仲嘉地)	家型
50	豊見城市平良	剥き出し型
51	南城市佐敷小谷	神社型
52	南城市佐敷佐敷	琉球石灰岩
53	南城市佐敷新里	琉球石灰岩
54	南城市佐敷津波古	赤瓦型
55	南城市佐敷手登根	小祠
56	南城市佐敷屋比久	家型
57	糸満市武富	家型
58	伊是名村諸見	不明
59	伊是名村勢理客	不明
60	伊平屋村我喜屋	不明
61	伊平屋村田名	不明
62	久米島上江洲	不明
63	久米島大原※※	神社型

(6) 祭祀組織（参考文献リストは最後にまとめた）

1	国頭郡国頭村奥間	村役場職員、自治会役員、村民
2	国頭郡今帰仁村越地	宮里家一族(門中)
3	国頭郡本部町瀬底	上間家→大正時代から自治会職員
4	国頭郡本部町浜元	門中→門中と自治会職員→門中
5	国頭郡宜野座村松田	不明
6	うるま市与那城屋慶名	役人
7	うるま市喜屋武(現在は喜仲)	喜屋武・仲儀別組織として有志(喜有会)
8	うるま市宮里	不明
9	うるま市桃原(宮城島)	自治会
10	うるま市平良川	門中
11	中頭郡読谷村喜名	不明
12	中頭郡読谷村親志	自治会
13	中頭郡読谷村長田	西組と東組に分けられ、西組
14	中頭郡嘉手納町水釜	自治会及び有志
15	中頭郡嘉手納町千原	不明
16	中頭郡嘉手納町久得	字民
17	中頭郡北谷町桑江	現在は祀っていない
18	中頭郡北谷町砂辺	字民
19	中頭郡北谷町玉代勢	字民
20	中頭郡北谷町北谷(山川家)	門中の神役ウマリ(女性神役クディ)
21	中頭郡北谷町上勢頭	上勢頭田中組のニーセーガシラ
22	中頭郡北谷町伊礼(現伊平地区)	字民
23	中頭郡西原町棚原	不明
24	中頭郡西原町翁長	現在は祀っていない
25	中頭郡西原町我謝	不明
26	宜野湾市大謝名	自治会
27	宜野湾市宜野湾	宜野湾郷友会役員
28	浦添市牧港	現在は祀っていない
29	那覇市久米	家庭内
30	那覇市安里	不明
31	那覇カラヤー(長田へ移動)	陶工の頭が司祭者
32	那覇市宇栄原	旧家(家庭祭祀)、神人の指示
33	那覇市大嶺(現宇栄原)	自治会
34	那覇市国場	自治会
35	那覇市首里平良	不明
36	那覇市壺屋	陶工やその家族
37	那覇市安次嶺	不明
38	那覇市垣花(現山下町)	不明
39	那覇市真嘉比	不明
40	那覇市牧志	陶工
41	那覇市石嶺	不明
42	那覇市首里山川	陶工の頭
43	那覇市松川	不明
44	那覇市寄真(長田(那覇カラヤー)と同一か)	不明
45	那覇市安謝	不明
46	那覇市泊	不明
47	那覇市若狭	不明
48	豊見城市与根	自治会
49	豊見城市我那覇(現仲嘉地)	自治会
50	豊見城市平良	不明
51	南城市佐敷小谷	自治会
52	南城市佐敷佐敷	自治会
53	南城市佐敷新里	自治会
54	南城市佐敷津波古	自治会
55	南城市佐敷手登根	自治会
56	南城市佐敷屋比久	自治会
57	糸満市武富	不明
58	伊是名村諸見	フトウキアタイを中心に自治会、村長、議員
59	伊是名村勢理客	フトウキアタイを中心に自治会、村長、議員等
60	伊平屋村我喜屋	不明、島尻と合同拝所
61	伊平屋村田名	不明
62	久米島上江洲	不明
63	久米島大原	不明

(7)招来時期 判明しているものだけを抜粋した

地域名	年代	屋取	神体	招来の契機
那覇市大嶺	1698		石(元は像)	役人
本部町瀬底	1712		神像	祖先(役人)
西原町棚原	1790		神像	祖先(役人)
読谷村長田	1879	屋取	無	不明
嘉手納町干原	1897	屋取	石	サーターヤーの完成
読谷村親志	1899	屋取	石	石川嘉手刈より勧請
嘉手納町久得	1902	屋取	不明	移住後まもなく
嘉手納町水釜	1917	屋取	石	読谷村喜名の易者の助言
那覇市安次嶺	1919		石	湖城(現山下町)から勧請
那覇市宇栄原	1960		不明	神人の助言
那覇市壺屋	1979		不明	神人の助言

【主要参考文献リスト】

- 安斎伸 1984 『南島におけるキリスト教の受容』 第一書房
- 伊是名村史編集委員会 1989 『伊是名村史下巻(島の民俗と生活)』 伊是名村
- 糸満市史編集委員会編 2010 『糸満市史資料篇 13 村落資料—旧兼城村編—』 糸満市役所
- 浦添市史編集委員会 1983 『浦添市史 第4巻資料編 3 浦添の民俗』 浦添市史編集委員会
- うるま市具志川市史編纂委員会編 2011 『具志川市史 第八巻 民俗編上』 うるま市教育委員会発行
- 及川祥平 2021 「宗教的なもの」 岩本通弥 門田岳久 及川祥平 田村和彦 川松あかり編 『民俗学の思考法〈いま・ここ〉の日常と文化を捉える』 慶應義塾大学出版会
- 沖縄久米島調査委員会編 1983 『沖縄久米島資料篇 「沖縄久米島の言語・文化・社会の総合的研究」報告書』 弘文堂
- 加持順人 2000 『沖縄の神社』 ひるぎ社
- 2008「神道」渡邊欣雄 岡野宣勝 佐藤壮広 塩月亮子 宮下克也編 『沖縄民俗辞典』 吉川弘文館
- 嘉手納町史編纂委員会編 1990 『嘉手納町史 資料篇 2 民俗資料』 嘉手納町役場
- 門田岳久 2007 「対話と信心—巡礼経験者の語りにみる自己・他者・社会—」 『日本民俗学 251』
- 喜名誌編集委員会編 1998 『喜名誌』 喜名公民館
- 宜野湾市史編集委員会編 1985 『宜野湾市史第五巻 資料篇四 民俗』 宜野湾市
- 球陽研究会編 1974 『球陽』 角川書店
- 具志川村史編集委員会 1978 『久米島具志川村史』 具志川村役場
- 久得史編纂委員会 2019 『嘉手納町「久得史」』 久得郷友会
- 国頭村史『くんじゃん』編さん委員会編 『村制施行百周年記念(資料編)』 国頭村役場

- 国頭村役場編 1967 『国頭村史（別冊）』 国頭村役場
- 窪徳忠 1970 「沖縄地方の土帝君信仰」 窪徳忠編 『沖縄の社会と習俗』 東京大学出版会
- 1971 『沖縄の習俗と信仰—中国との比較研究』 東京大学東洋文化研究所
- 1975 「沖縄における外来宗教の受容と変容」 九学連合編 『人類科学〔共同課題〕 沖縄 第27集』 旧学会連合
- 1978 『沖縄の外来宗教—その受容と変容』 弘文堂
- 1990 『目でみる沖縄の民俗とそのルーツ』 沖縄出版
- 久米島西銘誌編集委員会 2003 『久米島 西銘誌』 久米島西銘誌編集委員会
- 小松和彦 「分散・個別化する民俗宗教研究」『日本民俗学』214号
- 塩月亮子 2008 「トゥーティーク」 渡邊欣雄 岡野宣勝 佐藤壮広 塩月亮子 宮下克也編 『沖縄民俗辞典』 吉川弘文館
- 島尻勝太郎 1980 『近世沖縄の社会と宗教』 三一書房
- 諸見清吉編 1981 『伊平屋村史』 伊平屋村史発刊委員会
- 新屋敷幸繁編 1980 『与那城村史』 与那城村役場
- 末本誠 2013 『沖縄のシマ社会への社会教育的アプローチ—暮らしと空間のナラティブ—』 福村出版株式会社
- 瀬底誌編集委員会編 1995 『瀬底誌』 本部町瀬底
- 田中雅一 2012 「はじめに」 田中雅一・小池郁子編『コンタクト・ゾーンの人文科学第Ⅲ巻—Religious Practices/宗教実践—』 晃洋書房
- 北谷町史編集委員会 1992 『北谷町史第3巻資料編2 民俗上』 北谷町役場
- 北谷町史編集委員会編 1992 『北谷町史 第3巻 資料篇2 民俗下』 北谷町役場
- 津波古字誌編集委員会 2012 『津波古字誌』 字津波古自治会
- 豊見城市市史編集委員会民俗編専門部会（編） 2008 『豊見城市史 第二巻 民俗編』 豊見城市役所
- 豊見城村史編纂委員会編 1964 『豊見城村史』 豊見城村役場
- 鳥越憲三郎 1965 『琉球宗教史の研究』 角川書店
- 仲松弥秀 1990 『神と村』 梶社
- 中村誠司 2001 「沖縄における地域誌および字誌づくりの現在と可能性」 『東アジア社会教育研究』 No.6 東京・沖縄・東アジア社会教育研究会
- 今帰仁村史編纂委員会編 1975 『今帰仁村史』 今帰仁村役場
- 今帰仁村歴史文化センター編 2007 『なきじん研究 2007 vol.15』 沖縄県今帰仁村教育委員会今帰仁村歴史文化センター
- 波平エリ子監修 2012 『小禄の拝所』 那覇市小禄南公民館
- 那覇市企画部市史編集室編 1979 『那覇市史資料篇第2巻中の7 那覇の民俗』 那覇市企画部市史編集室

南城市史編集委員会 2010 『南城市史 総合版（通史）』 南城市教育委員会
 南城市教育委員会編 2018 『南城市の御嶽』 南城市教育委員会
 南城市教育委員会文化課市史編さん係 2020 『南城市の沖縄戦 資料篇』 南城市教育委員会
 西原町史編纂委員会編 1989 『西原町史 第四巻資料編 3 西原の民俗』 西原町役場
 比嘉政夫 1983 『沖縄の門中と村落祭祀』 三一書房
 平井芽阿里 2007 「村落祭祀継続の要因に関する一考察—なぜ神役であり続けるのか：宮古諸島西原の事例—」『比較民俗研究』 21
 古家信平 1996 「口承と書承」 『現代民俗学入門』 吉川弘文館
 宮平盛晃 2019 『琉球諸島の動物儀礼シマクサラシ儀礼の民俗学的研究』 勉誠出版
 本部町史編集委員会編 1984 『本部町史資料編 2』 本部町役場
 森田真也 2002 「南島とアジア」 小松和彦 関一敏編 『新しい民俗学へ 野の学問のためのレッスン 26』 せりか書房
 柳田國男 1925 『海南小記』 大岡山書店
 山内健治 2019 『基地と聖地の沖縄史 フェンスの内で祈る人びと』 吉川弘文館
 吉野航一 2012 『沖縄社会とその宗教世界—外来宗教・スピリチュアリティ・地域振興—琉球弧叢書②8』 榕樹書林
 読谷村史編集委員会編 1995 『読谷村史 第4巻資料編 3 読谷の民俗上』 読谷村役場
 読谷村史編集委員会編 1995 『読谷村史 第4巻資料編 3 読谷の民俗下』 読谷村役場
 琉球政府 19965 『沖縄県史 第11巻 資料篇 1 上杉県令関係日誌』 琉球政府
 W.P.リーブラ 1974 『沖縄の宗教と社会構造』 （崎原貢 崎原正子訳） 弘文堂

参考 HP

①西原町ホームページ

<http://www.town.nishihara.okinawa.jp/asset/29tanaharahigakenodoteikun.html>

（最終閲覧日 2022 年 4 月 25 日）

②南城市人口統計

<http://www.city.nanjo.okinawa.jp/shisei/introduction/population/>

（最終閲覧日 2022 年 4 月 25 日）